

家庭・学校・地域の連携強化

地域と協働で行う P T A 活動

東浦町立緒川小学校 P T A

1 はじめに

東浦町は、知多半島の付け根に位置し、豊かな自然と歴史に囲まれた町である。ぶどう作りが盛んで、巨峰はこの地域を代表する特産品である。また、徳川家康の生母「於大の方」の生誕地（緒川城）でもある。

本校は、明治5年に創立され、昭和18年に現在地に移転した。その時建てられた木造校舎を昭和53年度1学期まで使用していたが、校舎を全面改築し、2学期よりオープン・スペースを有する「オープン・スクール」として生まれ変わり、本年度で48年目を迎えた。平成23年には、全国に先駆けてユネスコスクールに加盟し、愛知県の公立小学校では、第1号のユネスコスクールである。学校規模は、児童数478名、学級数20学級（通常の学級17、特別支援学級3）で、東浦町内で児童数が一番多い小学校である。「学習の主体者は子どもである」という考え方の下、個別化・個性化教育の実践を進めている。



【緒川小学校校舎】

2 研究への取組

(1) P T A 組織

本校のP T Aは、15名の役員（内4名は職員）を中心に、1学年につき8名の保護者が委員として選出され、6つの部に分かれて活動を行っている。各部の構成は、研修部（1年生委員・職員・会員）、環境整備部（2年生委員・職員・会員）、保健体育部（3年生委員・職員・会員）、学習材整備部（4年生委員・職員・会員）、広報文化部（5年生委員・職員・会員）、校外生活部（6年生委員・職員・会員）である。令和7年度のP T A活動のスローガンは、「みんなで学び、支え合う、緒川のやさしい未来づくり」である。

(2) 研究のねらい

昭和53年度の新校舎への荷物搬入の際、夏休みにP T Aも協力して行ったという逸話が残っている。P T Aが学校の応援団として活動してくださる風土があり、P T A活動に対して協力的な保護者が多い学校である。一方で、保護者の働き方や時

間の使い方が多様化している現状もある。一律に参加を求める活動は、気持ちはあっても参加ができないという保護者の葛藤や、運営する委員の負担につながってきている。そこで、「持続可能なPTA活動」をキーワードに、保護者が一人一人の状況に応じて参加しやすい活動を目指し、各部の活動を見直すことにした。そして、参加する日が指定されている当番活動は、回数を減らしたり、期間を設けて参加可能な日を選べるようにしたりした。また、当番制をボランティア制に変更した活動もある。しかし、活動をスリム化していく一方で、子どもたちの安全を守るために活動や、子どもたちが楽しみにしている活動は、これまで通り質を保ちつつ目的を達成したい。そこで、他団体や地域の力を借りることで、活動を継続していくことを本研究のねらいとした。

3 実践活動の概要

(1) 地域学校協働活動推進員との連携

本校には、総合的な学習の時間の中で、4から6年生を対象としたオープン・タイムという学習がある。個人で活動内容や活動計画を決めて取り組むため、内容が多岐にわたる。例えば電動工具を使って木工製品を作る児童もいれば、ミシンを使って布製品を作る児童もいる。児童が安全に活動できるように、例年PTA活動として、4年生の保護者が当番で見守りをしてくださっている。本年度は、日程調整や当番表作成など、保護者とPTA委員の負担を軽減する観点から、当番制ではなく、ボランティア制とした。そのため、保護者は都合のつく日を選んで参加できるようになった。しかし、想定していたものの、参加人数の減少と活動日により人数に偏りがあることが課題となった。そこで、地域学校協働活動推進員と現状を共有したところ、自治会の回覧板でボランティア募集の案内を出したり、直接地域の方に参加を呼びかけたりしてくださった。その結果、地域の方が3名、継続的にボランティアとして参加してくださるようになった。



【オープン・タイムボランティア】

(2) 地域ボランティアとの連携

日頃から交通安全指導に努めているが、歩道がない狭い道や信号機のない横断歩道が通学路になっている児童が多い。学校

生活に慣れていない1年生の下校に付き添う活動として、「下校サポーター」がある。1年生のPTA委員が中心となって、付き添うコースと活動日を決定している。5月末までは毎日当番が割り振られているが、保護者の負担軽減の観点から、6月以降は一週間の枠を割り振り、都合のよい日に一回見守り活動を行ってもらっている。保護者の見守り活動により、子どもたちが安心して下校できているが、保護者の見守りがない日も当然ある。そのため、PTAが主体となって「スクールガード」の募集も行っている。登録してくださった地域の方がボランティアとして登校時に交差点で立哨を行ったり、下校時の見守り活動を行ったりしてくださっている。ボランティアの方には、継続して取り組んでいただけよう、毎月下校時刻一覧表と学校の活動を紹介するお便りを作成し、お届けしている。また、地区には子どもたちを不審者から守ることを目的に老人会の方が結成した「チームカメレオン」が定期的にパトロール活動を行ってくださっている。こうした団体にも下校時刻一覧表をお渡したり、下校時の子どもたちの様子を情報共有したりしながら連携を図っている。

(3) 子供会育成会との連携

夏休みの終わりに子どもたちの思い出作りとして、学校の運動場で水遊びのイベントを計画したいと子供会から相談があった。子供会としては、会員に限らず広く参加者を募集することで、子供会の活動を知ってもらいたいという思いもあった。そこで、PTA役員と協議した結果、子どもたちが安心して遊べる場所を提供することにPTAとしても協力したいという意見があり、子供会育成会とPTA共催の行事として、開催することになった。PTA役員が学校との連絡調整を行い、当日の運営は、子供会育成会役員とPTA役員が中心となって行った。夏休み出校日の午後を開催日としたため、職員も一部参加し、子どもたちと触れ合う機会となった。参加した児童は持ち寄った水鉄砲での当てゲームや水遊びを楽しんだ。

この時の連携を基に、秋に本校で開催したPTAバザーでは、子供会ブースを設けることになった。昨年度は子供会育成会が地域の施設を借りて単独で行っていたキッズマーケットを、PTAバザーの会場で行ったのである。より多くの参加者を望む気持ちは



【キッズマーケット】

共通していたため、相乗効果もあり、当日は多くの地域の方が来場された。

(4) 「地域食堂おがわっこ」との連携

本校では、2年に1回のペースでPTAバザーを開催している。物品の回収や仕分け、値付け作業等、担当年度のPTA役員は準備に多くの時間を割いてきた。本年度は、持続可能な方法での開催を目指す観点から、PTA役員からコンパクトで短い準備期間で開催可能な方法を考えたいという提案があった。そこで、回収するバザー品は学用品を中心にニーズの高い物品に限定することとなった。規模は縮小したが、より多くの地域の方に参加していただくために、前述の通り、子供会育成会の出店ブースも設けた。そして、もう一つ、多くの年齢層の方に参加していただく企画として、「地域食堂おがわっこ」を本校家庭科室で開催した。

「地域食堂おがわっこ」は、誰もが心地よく過ごせる居場所づくりを目指していることも食堂である。当日は、カレーライスをいただいた後、多くの親子連れがバザー会場に立ち寄ってくださった。



【地域食堂おがわっこ】

4 おわりに

地域の方が学校に入ってくださることで、子どもたちはさまざまな人と関わる機会を得ることができた。活動を通して地域の方と子どもたちが顔見知りになることは、とても価値のあることだと感じた。また、「子どもたちのためになることであれば協力したい」という思いは、地域の方もPTAも同じである。しかし、PTA活動が保護者にとって負担感のあるものであると、前向きな発想が生まれない。「例年通り」を引き継いでいくことだけが活動の中心になってしまふ。今回の研究では、地域学校協働活動推進員やPTA役員が中心となって連絡調整を行い、地域の方や他団体との連携を図ることができた。今後の課題は、地域と協働で行うPTA活動をコーディネートする役割を誰が担うかである。学校やPTAだけで推進していくとすれば、新たな負担となり、持続可能ではない。そこで、コミュニティや学校運営協議会との連携も視野に入れていきたい。そして、今後も持続可能なPTA活動を模索し、スローガンに掲げた「みんなで学び、支え合う、緒川のやさしい未来づくり」を実現していきたい。